

# 「現代社会」におけるフィールド・ワーク

田中裕巳

## はじめに

中・高の社会科において、フィールド・ワークを特に重視してきたのは歴史と地理である。中学においては、身近な地域を学ぶということで、歴史学習の一環として、主に古代遺跡と近世以降の史跡の見学、地理学習の一環として地域の工業化にともなう諸問題の見学、調査が行われてきた。あるいは地域学習が地理と歴史の両面からアプローチされる場合も多かった。高校においては、修学旅行における奈良・京都の見学が、日本史学習の中にきちんと位置づけられて実施される場合もかつては多かったが、最近では、フィールド・ワークと言えば、地理の専売特許のようなものであった。このような一般的な状況の中で、「現代社会」が実施されて以降、フィールド・ワークのお鉢が〈公民的分野〉の担当者にまわってきて、地理・歴史の担当者の悩み・苦勞をようやく共有することになり、かつ、地理・歴史の担当者に比して、フィールド・ワークを実施する際の基本的な経験不足をなげいている昨今である。地理学・歴史学そのものが実地調査・史料調査を抜きにして成立しないのに対し、「現代社会」がよってたつ倫理・政治・法律などの諸学は理論的アプローチに終始しやすい。高1において、社会科における唯一の必修科目としての「現代社会」を学ぶことを通して、社会科は現実の諸問題の解決のための知識・技術・態度を身につけさせる教科であることをきちんと認識させたいものである。そのためには、かつて地理におけるフィールド・ワークが、高校社会科の意義を認識させるオリエンテーションとしての位置を持たされていたと同様の課題を「現代社会」は持たざるを得ないと思う。このような観点から、「現代社会」におけるフィールド・ワークの意義と一つの試みを紹介するのが本稿の目的である。

## 〔1〕「現代社会」におけるフィールド・ワークの意義

かつては、高等学校学習指導要領（昭和45年10月告示）において、「必要に応じて見学、調査などを実施することによって、学習効果をあげるように努めること」という趣旨の文章が、倫社・政経・日本史・世

界史・地理A・Bのすべての科目の「内容の取扱い」に明記されていた。特に地理においては、野外調査が「指導計画の中にそのための時間を設けて実施すること」とされていた。

現行指導要領（昭和53年8月告示）によると、第3款「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」の第2項に「（前略）観察、見学及び調査したことを発表したり報告書にまとめたりすることなど、様々な学習活動を工夫して学習効果を上げるようにする必要がある」とあるだけで、地理の「野外調査」を除けばその他の科目においては、見学・調査に関する注意はない。第3款は全科目への但し書きであるから、高校社会科において別段見学・調査を軽視するようになったとは言い切れないが、かつて高1の地理において「野外調査」が実施されていた程度に、「現代社会」においてもフィールド・ワークが実施されていくかどうかは悲観的にならざるを得ない。

本校では、社会科のカリキュラムの中にフィールド・ワークを重視する姿勢を一貫してとってきた。中学校におけるフィールド・ワークについては、1977年度からの5年分を「社会科におけるフィールド・ワーク——中1、地理・歴史を中心に——」として原・丸山が報告している（本校紀要第27集、1982年）し、高校地理におけるフィールド・ワークについては、「地理における野外学習の位置づけ」という原の論文がある（本校紀要第23集、1978年）。原は同論文において、地理教育はインドアワークとしての室内学習とフィールドワークとしての野外学習から成り立ち、「フィールドワークとインドアワークは有機的に対応し、関連しあう」と述べている。同論文の後半は、地理・地学合同野外実習としての豊川水系を中心としたフィールド・ワークの実践（1978年度）を報告している。

本校の高1でのフィールド・ワークは、地理・地学合同野外実習として、1981年度まで実施された。新課程実施の第1年度（1982年度）は、「現代社会」および「理科I」の担当者にたまたま地理と地学の担当者があたっていたことから、前年度までの野外実習のスタイルがそのまま継承された。

1983年度から「現代社会」を担当することになっ

た私は、それまで「倫社」「政経」を担当することが多く、フィールド・ワークの実施は初めてであった。社会科の教科構造全体をながめるとき、高1で履修する科目は、高校社会科のオリエンテーション的な役割を必然的に持たざるを得ない（本校社会科教室のスタッフの共著『社会科教育の道標』第一法規、1983年、とくに第9章参照）し、社会科学の方法としての見学・調査の重要性を体得させたい。それはかつて私達のスタッフであった加藤佳孝氏が次のように書いていることを受け継がねばならないという発想でもあった。

「社会科の中で地理を考える時、重要なことはあくまでも社会科全体のねらいを前提に、地理で社会科を教える、即ち、社会の諸々の現象・事象を歴史的政治経済的視点を押えさせながら地理的視点から見させ考えさせるという基本的視点を崩してはならないことである。このような姿勢をもつならば特に世界史や政治経済とかかわりあう学習内容を盛りこめるし、生徒に興味を持たせるのではないか。そしてこのような視点から考えられた学習体系に沿う学習が積み上げられるならば、地理は社会科の中で「社会認識、という目標に近づく重要な分野として位置づけられるだろうし、欠くことのできない見方・考え方を社会科に提供することは確かである。」（本校紀要第18集、1972年、「生徒が主体的に学習できる地理を考える視点、P101」）

「地理で社会科を教える、という視点は、高校社会科の教科構造として、当時のスタッフで常に話し合われた視点である。新課程においては、いわば「現代社会」で社会科を教える、視点が必要ではないか。そういう想いの下に、社会科は、実態から出発して、理論（化）を学び、再びその理論を実態に応用し、問題を解決して行くことが肝要である。そのためには、「現代社会」においてもインドア・ワークばかりでなく、フィールド・ワークが実践されねばならないのである。

## 〔2〕フィールドとしての名古屋臨海工業地帯

「現代社会」という科目に即してフィールド・ワークを考えれば、次のようなフィールドが一例として考えられるだろう。

- 環境・資源問題の分野では……生態系の破壊を見るために河川や湖沼の汚染、宅地造成・森林伐採の現地。輸入農産物たとえばバナナや木材などの輸入を通して南北問題へのアプローチ。
- 政治・経済の分野では……三権分立の制度を具体的

につかむために国会・裁判所等。平和主義の現実を見るために米軍基地・自衛隊基地等（これは難しい）。地方自治のしくみを学ぶために県庁・市役所等。日本経済の特質をつかむために貿易港・企業の工場等。社会福祉の実態をつかむために身障者施設・老人ホーム等。国際平和に関して原爆資料館・丸木美術館等。

○文化の分野では……明治村・リトルワールド・博物館・郷土館等。

○倫理の分野では……渡辺華山の足跡をたずねて、古橋懐古館等。

1983年度は、年間の授業計画、担当者の都合（私が政経を中心とする分野を2単位、非常勤講師が倫理を中心とする分野を2単位で分担）という2つの条件で、経済的な問題を中心として「現代社会」にアプローチできるフィールドとすることに決まったのが夏休み前。11月10日の実施日にむけて、実際に見学地の交渉に入ったのは9月末からであった。

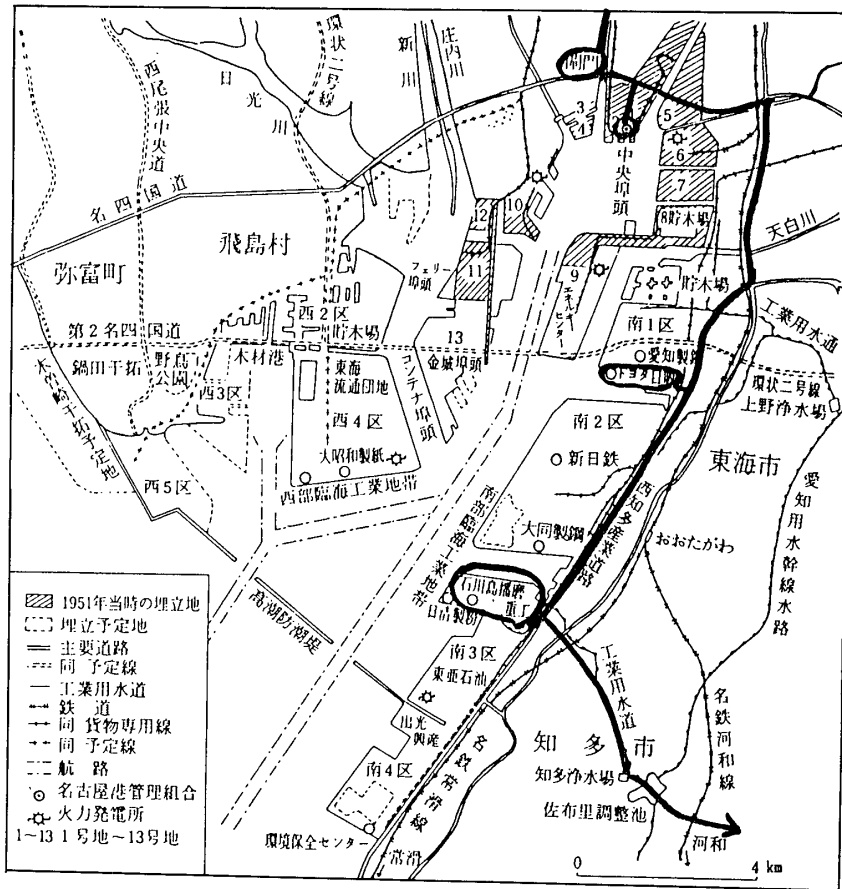
社会科教室全員で当初検討した見学コースは次の通りであった。

学校→中川運河閘門→名古屋港管理組合→新日鉄東海工場→知多・上野浄水場→知多半島自動車道経由・高辻→学校

コース設定の理由は、中京工業地帯の最大の貿易港および臨海工業地帯の見学を通して日本経済の現況をつかむとともに、中京工業地帯の変貌をもつかませる。中川運河閘門は、中川運河の汚染・浄化の問題だけでなく、閘門と名古屋港との関係、中川運河周辺の産業立地・工場立地の問題を考えるのにふさわしい。知多浄水場の見学は愛知用水の問題、とくに臨海工業地帯への工業用水の供給、知多半島住民への生活用水の供給を考えさせる。知多半島道路から名古屋都市高速道路を経由とすることによって、高速道路の便利さとその反面としての交通公害の問題を考えさせる。このような確認の下に私が中心となって各見学先との折衝にあたったが、①新日鉄は小学5年生の見学が多く、12月中旬まで予約が一杯であること、②石川島播磨重工がバス車内からの見学であればOKであること、③名港から石川島知多工場への途中にあるトヨタ・モータープールの見学もOKであること、④石川島知多工場からは知多浄水場が近いことなどで、最終的なコースは次のようになった。

学校→中川運河閘門→名古屋港合同庁舎での名港管理組合・税関からの話しと映画、昼食→トヨタ・モータープール→石川島播磨知多工場→知多浄水場→知多半島自動車道経由・高辻→学校

フィールド・ワークの実施にあたっては、2時間の事前学習が行われた。11月5日、3クラス合同で、名



注 加藤武夫著『新しい愛知県地理』(大衆書房 昭和50年)の図55名古屋港 p.109にコースを記入したものである。

古屋港管理組合製作の『港に生きる』と石川島播磨重工業企画の『アマゾンをはらく 洋上を渡ったパルププラント』という映画を見せた。前者は名古屋港についての概略的な紹介、後者は造船会社の新生面を紹介したものであったが、とくに後者は知多工場で見学する人工島の予備知識として役立った。もう1時間はクラス別に、フィールド・ワークの「しおり」をもとに、簡単な注意と各見学地で注意して見るべき事項を確認した。

### [3] フィールド・ワークの実施

「現代社会」としての実質的な第1回のフィールド・ワークは次のように実施された(10月31日の会議に提出された実施案と実践にもとづく)。

#### 高1 校外学習実習要項

日時 昭和58年11月10日(木)  
 午前8時15分集合  
 午後4時30分解散  
 学年 高等学校第1学年(134名)  
 引率及び指導者:担任・副担任5名, 社会科教諭3名  
 (「現代社会」の担当の非常勤講師1名を含む),  
 計8名。  
 目的 高1で学習している現代社会・理科I・保健  
 などの学習内容により具体性をもたせるために

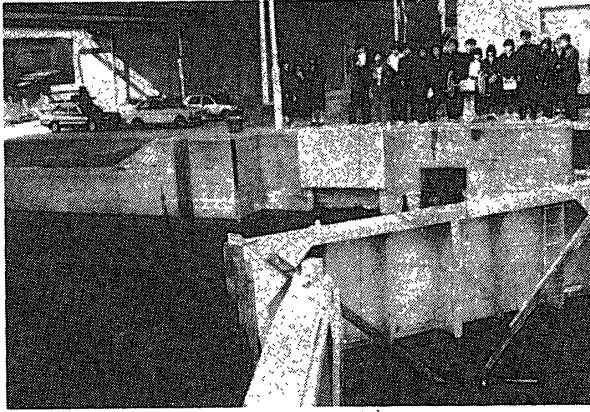
行なう。今年度は、それらの科目に共通している環境問題、公害問題を考えさせるフィールドとして名古屋臨海工業地帯を選んだ。同工業地帯の発展の歴史、現況等の学習は現代社会の経済分野の学習に役立つばかりでなく、社会科の他の科目——地理、歴史などを学習して行く上でも、共通に必要な認識といえる。愛知用水の問題を通して水資源の問題を、高速道路を利用することによって交通公害の問題を考えて行くいと口とすることもねらいである。

行程 集合(本校テニスコート)——出発——中川運  
 8:15 8:30 9:25—  
 河閘門——名古屋港合同庁舎——(ガーデン埠  
 10:00 10:15~11:50 12:00~12:40  
 頭にて昼食)——トヨタ・モータープール——  
 1:00~1:20  
 石川島播磨重工知多工場——知多浄水場——知  
 1:40~2:10 2:30~3:30  
 多半島道路・都市高速道路高辻インター——学  
 4:30  
 校帰着

携行品 しおり・筆記用具・弁当・水筒・カメラは自由。

### [4] 見学地での見学内容と問題点

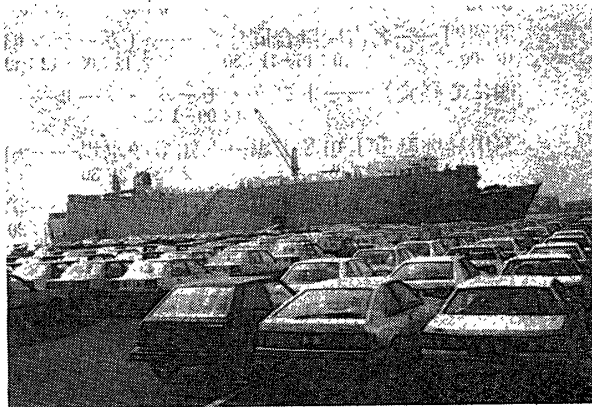
【中川運河閘門】中川運河は大正15年に開削工事が着



手され、昭和7年10月1日に開通されたものである。閘門は2基あるが、現在使用されているのは西側の1基のみである。名古屋港管理組合用地課の係員が説明してくれた。閘門指令室のマイクの性能がよく、このマイクを使つての説明は良く聞きとれた。海側と運河側の水位差がこの日は2メートル近くもあり、閘門の構造自体の面白さ、タイミングよく運河に入る船5隻、運河から出て行く船1隻の両方の操作を見れたこともあって、生徒たちは印象深かったようだ。運河の水の汚なさ、中川運河そのものの運命にも思いをはせた生徒も多く、名古屋臨海工業地帯における木材工業の衰退、西部木材工業団地への移動なども考えるのに適した見学地であった。

#### 【名古屋港合同庁舎での映画と講演】

映画は『海と空の門 税関』という30分ほどの税関のPR映画。名古屋港が国際港として税関と切っても切れない関係にあること、税関の業務の大要を知るという点においては意義があったが、わざわざ日程の中に入れなければならないかとなると疑問が残る。しかし場所の提供を受ける以上、やむなし。税関の担当者も来ていたのだから、簡単に質疑を行なわせた方が



写真説明【上・中川運河閘門、下・トヨタ・モータープール】

よかったかも知れない。

講演は名古屋港管理組合総務部振興課広報係の伊與田志津甫氏。高校生の見学は珍しいということで、管理組合への就職PRの話まで出て脱線。しかしながら、名古屋港の歴史についてプリントまで用意されての熱心な説明でした。講演についても質問の時間のないことが惜しまれました。工場見学の後に講演を聞けば、名古屋港および臨海工業地帯に関する質問が積極的に出てくるものと思われる。この点、見学コースの問題として改善の余地がありそうだ。

#### 【トヨタ・モータープール】

このコースは後から加わっただけに、全くの見学時間不足と言わなくてはならない。今や名古屋港からの輸出品目・輸出額の第1位をしめる自動車のプールを見ることは次のような意味で重要であろう。

- ①日米・日欧経済の貿易摩擦の原因を考えるために
- ②中京工業地帯の現状を考えるために
- ③小学校におけるトヨタの生産工場の見学に続いて、生産—流通—貿易という商品の流通の全過程を考えるために
- ④名古屋港におけるモータープールの位置——拡大傾向、臨接工場の煤煙等の公害対策、名古屋港の将来構想との関係などを考えさせる

見学は、3台のバスにそれぞれ1人ずつ船積課の社員が乗り込み、車内からの説明を受けながら構内を一巡して行われた。輸出先、車種などの説明があったが、ここでも質問の時間をとる必要があった。

#### 【石川島播磨重工知多工場】

ここもバス車内からの見学のみ。もう少し時間があれば、バスのままであるが工場の建屋にも入れたとのこと。労働課の課員がバス3台に分乗して下さり、車内から説明。先のモータープールの説明をしてくれた人達がいずれも若かったのに対して、ヘルメットをかぶった中年の男性ばかりであったのが印象に残る。広い敷地内は閑散としており、ドックにも新造船はなく修理船のみ。人工島は大西洋カナダ沖に敷設されるものだそうで、造船技術はここにも生かされている。高速道路の橋脚も受注しているとのこと、モータープールの立錐の余地のない自動車産業の隆盛と、斜陽の造船業の陸上部門への転生とが対照的に感得された。皮肉というか、うますぎるコースの設定であった。

#### 【知多浄水場】

知多工場から産業道路をしばらく走り朝倉から10分程で浄水場へ。生徒たちはいささか疲れて来たようだ。沈殿池、汙過装置等を地上部で説明を聞きながら見学したあと、地下の通路へ。塩素の強い臭いに頭痛を訴える生徒も多かった。

見学時間としては一番長い場所であったのだが、

135名の生徒を終始一人の係員が説明するというところで、特に狭い地下部分での説明が分かりにくかった。地下部分の見学は貴重な体験となったが、愛知用水全体の説明、佐布里池との関係、知多半島における愛知用水の用途などの説明が欲しかった。135名を受け入れられる研修室がないのかも知れないが、見学の後にインドア・ワークが必要であったのではないかと思う。

### 〔5〕生徒たちの受けとめ方

次の2つの文章は、フィールド・ワーク実施1カ月後の第2学期末テストにおいて、「高度成長以降の日本の産業構造の変化について、名古屋臨海工業地帯の現状を具体的な例として400字前後で述べなさい。次の語句は必ず1回は用いること。〔重化学工業・IHI（石川島重工の略称）・輸入・工業用水・オイルショック・輸送用機器〕※使用した箇所に下線を引いて示すこと。」という問題に対する解答例である。高度成長期以後の日本経済の特色を、地域の具体例を通して考えさせようとした訳であるが、フィールド・ワークの知見がよく消化されていると思う。

・「高度成長以降、日本の産業は新たな時代をむかえた。第2次オイルショックと言われ、低成長の時代に入った。工業用水、原材料の輸入などの立地条件により、重化学工業を中心に作られた名古屋臨海工業地帯も、この事に大きな影響を受けた。例えば、IHI。このIHIは、当初、造船関係を中心に進められてきたのだが、この1970年代におこった造船不況のあおりをくらい、製品の転換に迫られた。そして、現在、陸上部門への進出、新しいプラントシステムの開発などによって産業の発展をめざしている。

またここには、トヨタのモータープールもある。名古屋港の輸出品目の代表である輸送用機器（自動車等）は、ここから海外へ輸出しており、この輸送用機器は、世界的にも有名である。このように日本産業は、この時代においても強い適応力で次の時代をめざしていくのである。」（A君）

・「名古屋臨海工業地帯は主に名古屋市南部から東海市、知多市にかけての工業用水の豊富な、また総合港名古屋港をひかえた地に立地している。業種は高度成長期にはIHIをはじめとする重化学工業、造船業が中心だった。また自動車などの輸送用機器なども立地しつつあった。ところが1973年11月のOPECによる石油価格の大幅引き上げ、第一次オイルショック、また続いておこった第二次オイルショックで日本の産業全体が大打撃を受け、原油の輸入が以前のようにはいかなくなってしまった。これによって、造船業は不況となりIHIでも方向転換の必要性をせまられ現在は造船からエンジン、プラント用機械などに変化しつつある。また現在は自動車産業が活発化しどんどん輸出されているがこれが世界各国で問題となり輸出のさく減をせまられている。オイルショックによる方向転換をよぎなくさせられた日本産業だが外交面とのかかわりからまた新たな方向転換が必要になると思われる。」（Sさん）

与えられた課題に対しての400字前後での説明としては、高校1年生の文章として良く出来ている方であろう。しかしながら、これは今回のフィールドワーク全体についての実施者としての反省点でもあるのだが、見学地が多すぎたためにそれぞれの突っ込みが全く不十分であったということである。この課題について言えば、造船業の延命策の内にひそむ問題点——徹底した合理化や人員整理、自動車産業の急成長に伴う問題点——下請け企業の問題、合理化、ロボット導入などは、結局、インドアワークでしか取り上げることが出来ず、見学地においてはいっさい問題とされなかった。このような突っ込み不足が、生徒達の解答の中にも反映していることを認めざるを得ない。工場見学が、企業PR的側面を濃厚に持ち、経営サイドからの説明や見学しか許可されない現状では出来ない相談なのかも知れないが、見学地をもう少し絞り、生徒達の質問に可能な限り答えてもらう時間をそれぞれに30分くらいずつ確保すれば、改善の余地はあるように思う。